病院図書室　15(1):52-55, 1995

臨床に役立つ雑誌⑧　— 循環器科 —

私立病院における循環器領域の雑誌

— 開かれた図書室とその周辺風景 —

松　村　憲太郎

1.　はじめに

図書室は病院の知的財産を集中し、病院の知的発展を保障する。私共の病院図書室は地域の中にあって、住民に開放され、また入院患者の利用も多い。次代を担う子供達に「子供図書室」として休日に利用してもらい、本へのふれあいを子供のときから作って行くことも、私共の病院の使命の一つかもしれない。

ベットサイドを廻っていて、食事療法や薬のこと、病気のことについて話していると、しばしば図書室で借りて来た本を片手に、自然と話が弾んで行く。納得することが多く、会話はスムーズに流れる。病気に打ちひしがれ、暗くなるこころに病院図書室は、豊かな内的世界を提供するとともに、図書室がこのように治療の一端を担い、ともに歩んで行こうとすることで、これからの新しい病院図書室の姿が見えてくる。しかし、このための図書室司書の努力は大変なものと思う。従来の病院図書室が医師を中心とした医療従事者のためだけにあったのが、このように患者や地域に開放されることによって、医学・医療が医療者の独占であった時代を終えようとしている。医療法人という特殊性が、このような特異な試みを可能にしているとは思えず、時代の必然として開放化は今後進んで行くと思われる。医療は誰かのためだけにあるのではなく、ひとしく地域の中にあってこそ、その豊かな発展が可能だと思う。知識は独占されるのではなく、共有されてこそ発展する。

2.　循環器学という混沌

私は大学における体系的な卒後研修を経ずに、直接現在の病院（医療法人）に就職したため、研究のための方法論や体系化を学ぶことはなかった。亜流の私に、循環器領域の雑誌を俯瞰する資格はあまりないと思われるが、それにしても、私の卒業した1974年は循環器病学にとっても重要な年だったと思う。ちょうど超音波検査が臨床に導入され、その研修に追われていたのが思い出される。それまでは循環器の検査として心電図以外には心音図ぐらいしかなく、診断学もそれほど多彩ではなかった。しかし、20年を経た今日では画像診断が飛躍的に発展し、それぞれの領域で雑誌が発行され、情報量も当時とは比較にならないほど膨大になっている。核医学やＭＲＩなどの新しい診断技術やPTCA（経皮的冠動脈形成術）に代表される interventional cardiology の新たな出現は、循環器学を更に細分化し、逆に総合的な視点を喪失しようとしている。一人の医者が全体像を摑むことはもう不可能になっている。しかし、病気が単一な要素で成り立っている場合は少なく、全体を見ながら治療を進めて行くことが必要であり、細分化と統合化は現代医療の宿命と

まつむら　けんたろう：京都南病院副院長

言っても過言ではない。幸いにも、分化と統合を可能にする、情報の集積の場としての図書室を病院内にもっていることは、私共にとって幸せだったと思う。

循環器領域は広大であり、扱う雑誌も無数にある。自然と読まれる雑誌は限定される。混沌とした中から、自分自身に合った雑誌を選択し、日常に還元する作業が日々繰り返される。「日本循環器学会」は、取り扱う領域の広さのため、あまりにも肥大化し、方向性が混沌としている。学会発表と論文発表の落差を考えるとき、学会の在り方に反省の時期が来ていると思う。現在の「日本心臓病学会」は、私が医者になったときは「心音図研究会」という名称で、つづいて「心臓図学会」に変わったが、いずれも演題の採択基準が厳しく、そのまま論文になるレベルの発表がほとんどであった。会場はひとつで、討論時間も十分あり、それを聞いているだけでもおおいに勉強になったのを覚えている。今では学会は細分化され、メモ的要素が強くなっている。自分自身の研究テーマに沿って論文を集め、まとめることで、新しい方向性をつかむという時代だと思う。

3. 私の病院図書室利用法

日常診療が多忙になるにつれ、医学雑誌を閲覧する時間が取れなくなって来ている。現在の利用法は、contents のタイトル・コピーを見ながら、必要な論文を依頼したり、また、研究テーマや日常遭遇する疾患の文献検索を、key words に基づいて依頼したりして利用している。一昔前の文献検索は、key words の不適切さもあって、なかなか思うように求める論文を捜し当てられなかったが、現在では、司書の努力もあって、ほぼ十分な文献リストを手にすることができる。今では、効率の点からもこの方法を利用している。私の中でも、循環器領域として心臓カテーテル検査やアイソトープ検査、ＭＲＩなどが中心になって来ており、それぞれに関連した研究テーマを毎年設定し、主に論文発表に仕上げて行っている。核医学やＭＲＩは放射線科関連の領域であり、この領域の雑誌もそろえている図書室は、私にとって非常に意義のあるものである。今でも循環器に関する他科の雑誌は頻回に利用している。論文を書くための文献の集積は図書室司書の協力があって初めて成り立つのであり、今では私の書く論文の一つひとつは、司書との共同作業の成果と思っている。

4. 一私立病院の循環器系雑誌

私共は年一回『京都南病院医学雑誌』を発行している。雑誌としての体裁は今でも不十分だと思うが、もう30年近い歴史をもっており、自分自身の発達（？）を知る意味では貴重な雑誌と思っている。このために年間150万円の予算を割いているが、医療法人としての医療レベルを保つために大いに貢献しており、私共の知的財産の一つと思っている。交換雑誌としても評価を得、定着している。

私共の病院は総合病院であるため、一応全科の医学雑誌を最低限のレベルで置いている。私共の病院に常設している循環器系国内雑誌は、和文雑誌として

(1) 心臓
(2) 呼吸と循環
(3) 脈管学
(4) 循環器科
(5) 心臓ペーシング
(6) 循環科学
(7) 循環制御
(8) coronary
(9) J.of Cardiology
(10) 心電図
(11) 肺と心
(12) Jpn.J.of Interventional Cardiology

などがあり、他に『高血圧』、『動脈硬化』や血管関係の『血管』、『血管と内皮』、『血栓と循環』、『血液と脈管』などがある。

また国内の英文雑誌は

(1) Bull.Heart Inst. Jpn
(2) Heart and Vessel
(3) Hypertension Research

(4) Jpn. Circulation J.
(5) Jpn. Heart J.

をおいている。循環器領域に cross over する放射線科関係や腎臓学関係の雑誌も比較的豊富に置かれている。J. of Cardiology, Interventional Cardiology, Jpn. Circ J. 心臓ペーシングなどの学会誌はおもに個人からの寄贈によっている。常設雑誌としては少なすぎるかも知れないが、文献検索システムが充実している現在では、それほど不自由を感じない。私にとって使用頻度が高い雑誌は『心臓』、『循環器科』、『Jpn. Circ J.』などである。学会誌以外に、私がよく投稿するのもそれらの雑誌であり、レフリー制度も比較的健全で、査読も丁寧なため、おおいに勉強になる。

循環器領域の外国誌は以下のものをおいている。すべて英文誌で

(1) Circulation
(2) Circulation Research
(3) J. of Am. Call. Cardiol. (JACC)
(4) Am. J. Cardiol. (AJC)
(5) Am. Heart J.
(6) Br. Heart J.
(7) Chest
(8) Annales of Thoracic Surgery
(9) Cardiology
(10) Circulatory Shock
(11) Core J. in Cardiology
(12) Heart & Lung
(13) Hypertension
(14) J. Thoracic & Cardiov. Surg.
(15) Pace
(16) Stroke

などである。Circulation や Circulation Research は研究的な要素が強いが、循環器病学へのインパクトは大きい。臨床家としては JACC や AJC, Am. Heart J. Chest などの方が実地に即した論文が多く、利用頻度が高い。また、トピックスも豊富にあり、最新情報を得るには手軽で良い。ちなみに Am. Heart J. の10年間の変化を clinical investigations の内容によって検討してみた。論文に取り上げられた循環器検査法の10年間の変遷を(表1)に挙げる。心電図検査のテーマが減少し、超音波検査が増加している。そして、超音波でも以前からある B-mode 検査はそれほど変わらずに、経食道エコーや血管内エコーが10年前には全くなかった検査法であった事もあり、今年では非常に増加している。また心臓MRI検査も増加している。同様にこの10年間の循環器治療法の変遷を Am. Heart J. で見てみた(表2)。一言で言えば、PTCAを中心にした interventional cardiology と言われる領域の治療法がこの10年で新たに出現したことである。このように、医学雑誌は検査法や治療法を、時代の変遷とともに如実に表しており、科学の進歩に追いつくための私共の努力も厳しく要求される。

私共の病院に常設している医学雑誌を挙げたが、欲を出せばまだ不足しているとも思われるし、また情報の全国ネットが発達している現代では、個々に雑誌を所蔵するのは不効率だと言う考えもある。病院図書室のスペースは年々増加する本や雑誌で埋め尽くされ、今ではいかに整理し、処分するかを考えるようになっている。知識の整理をうまく行うことが、皮肉にも「図書室とはなにか」という本質に最も早く到達する道かもしれない。

5. おわりに

図書室は病院の一方の顔といわれている。知的活動は病院の水準を決定するし、そのダイナミズムを支えている。知的財産のみが私共の病院のよりどころであり、医療法人としての経営は、知的活動の中から必然的に乗り越えられると思っている。そして、知的財産が病院だけの、医療者だけのものであってはならず、入院している患者や家族に共有され、また病院を支える地域によって共有されてこそ、はじめて病院の知的財産が全人的医療の中で生かされてくる。いま病院図書室は、それまでの医師だけの所有物から少しずつ変貌し、門戸を地域に向けて開いて行っている。

病気は患者自身の戦いとともに、地域の中で治して行かなければならない。与え、与えられるという関係から、共有し、創造する共同体としての病院を考えるとき、病院図書室の役割は知的結合の中核としてますます重要となる。

「臨床に役立つ雑誌」というテーマとはかけ離れた内容になってしまったが、ベット数300床の病院で図書室をもち、多くの業務をこなす司書の献身的な努力の上で、循環器病の治療に専念できる私自身は幸せなのかもしれない。

【表 1】Am Heart JのClinical Investigationsで用いられた循環器検査法の変遷（'84. Vol 108 vs '94. Vol 127）

	1984(vol.108)	1994(vol.127)
心電図	41.3%	14.9%
心臓超音波検査	21.7%	53.2%
B-mode	17.4%	14.9%
ドプラー	14.3%	8.6%
経食道エコー	0.0%	19.1%
血管内エコー	0.0%	10.6%
心筋シンチ	17.4%	17.0%
心プール・シンチ	8.7%	2.2%
MRI	2.2%	8.5%
DSA	2.2%	0.0%
Holter心電図	4.3%	0.0%

KMH

【表 2】Am Heart JのClinical Investigationsで取り上げられた治療法の変遷（'84. Vol 108 vs '94. Vol 127）

	1984(vol.108)	1994(vol.127)
循環器治療薬	78.1%	46.2%
PTCA	0.0%	35.9%
stent	0.0%	10.3%
PTCR	6.3%	0.0%
心臓pacing	9.4%	2.6%
IABP	3.1%	0.0%
CABG	3.1%	2.6%
PTMC	0.0%	7.7%
PCPS	0.0%	2.6%
植え込み型除細動器	0.0%	2.6%

KMH